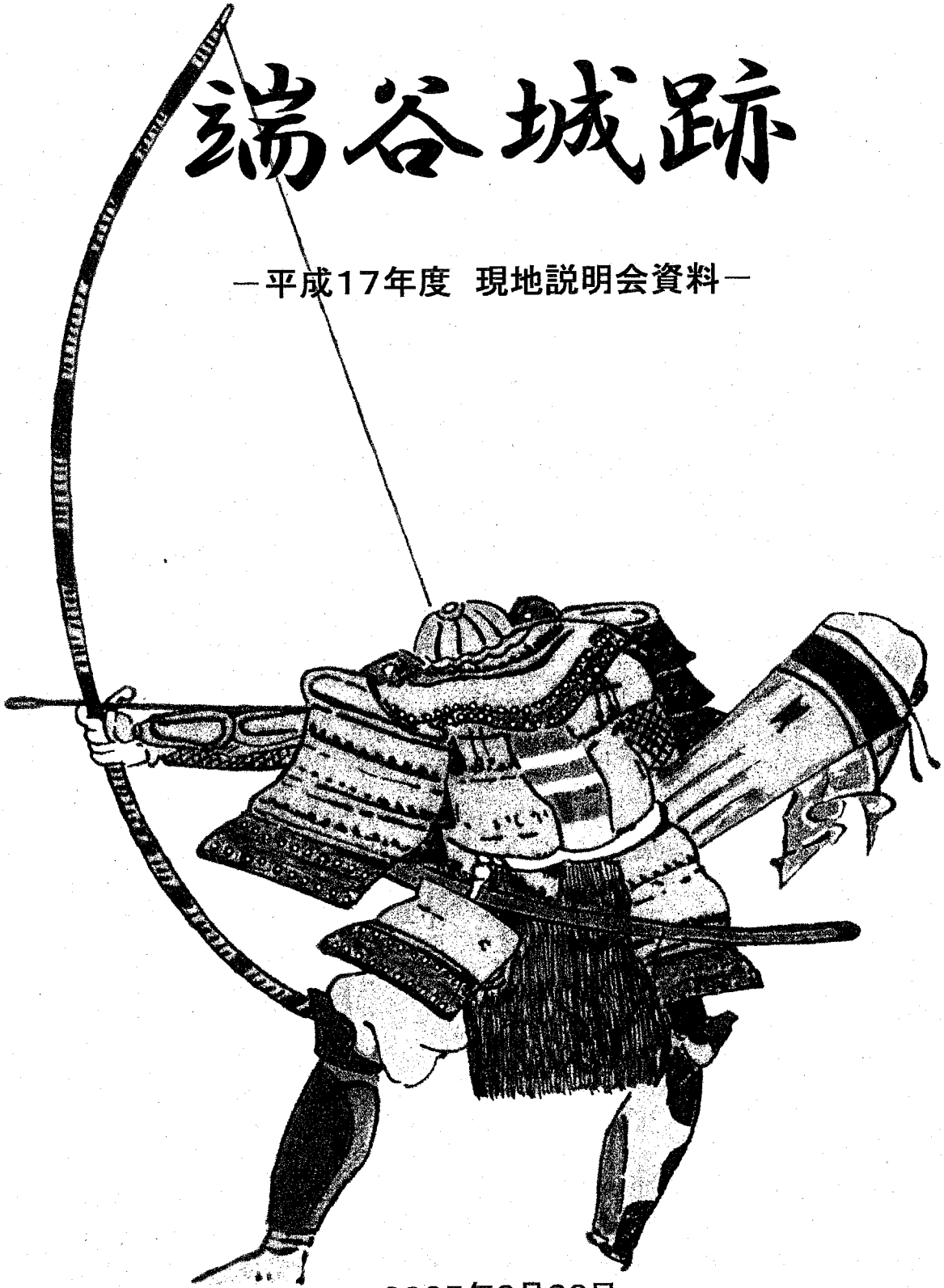


端谷城跡

—平成17年度 現地説明会資料—



2005年6月26日

神戸市教育委員会

調査に当たっては、国立歴史民俗博物館客員助教授 近藤好和先生
大坂大学文学部名誉教授 村田修三先生
神戸市文化財保護審議委員会 檀上重光先生のご指導を得ました。

表紙は、15世紀末頃に描かれた『結城合戦絵巻（中央公論社刊）』
の中の「胴丸」着用武者（模写）

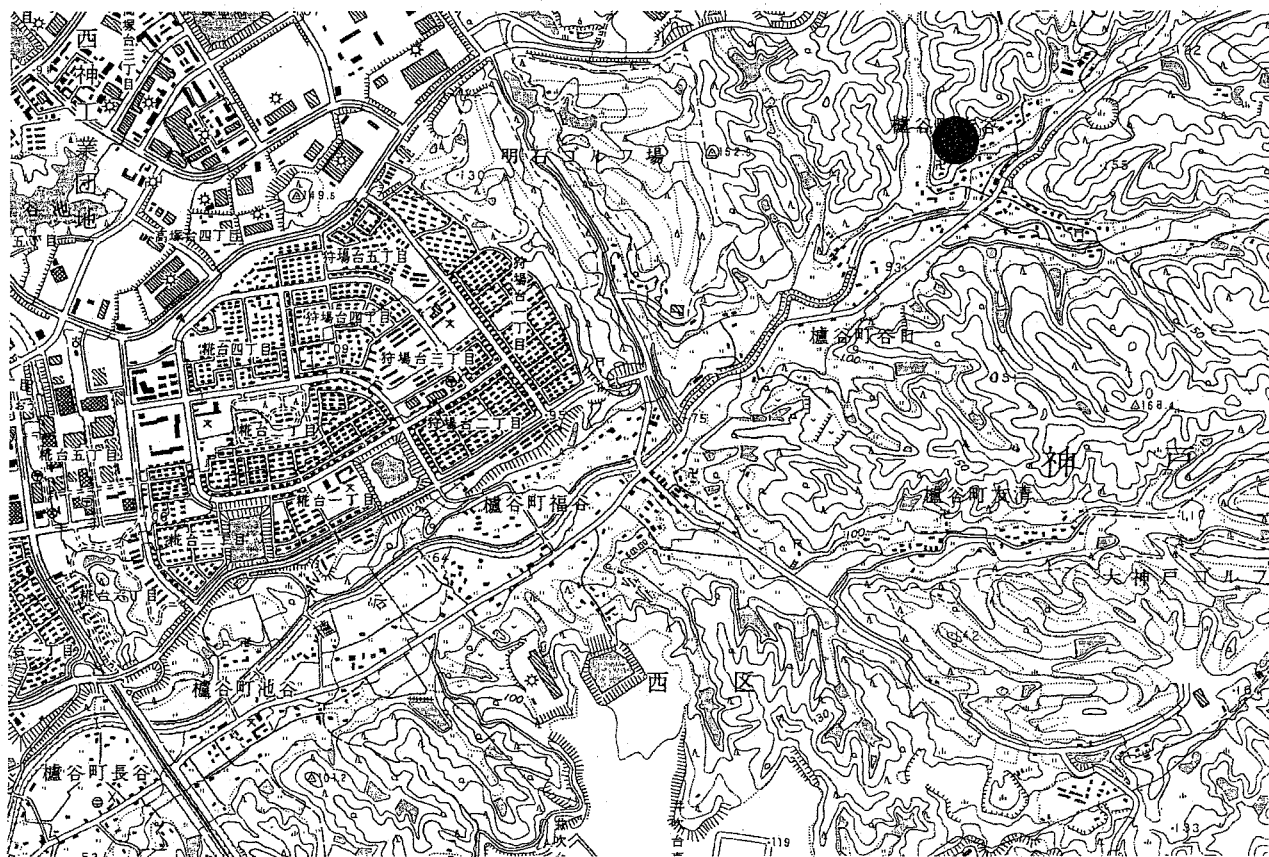
はじめに

神戸市西区櫛谷町寺谷にある^{はしたにじょう}端谷城は、明石川の一支流^{はせたにがわ}櫛谷川が形成した櫛谷の最奥部、寺谷の丘陵上にあります。室町時代に活躍した衣笠氏の居城で、調査以前から丘陵を切断した大規模な堀や、^{くるわ}曲輪がよく残る山城として知られていました。

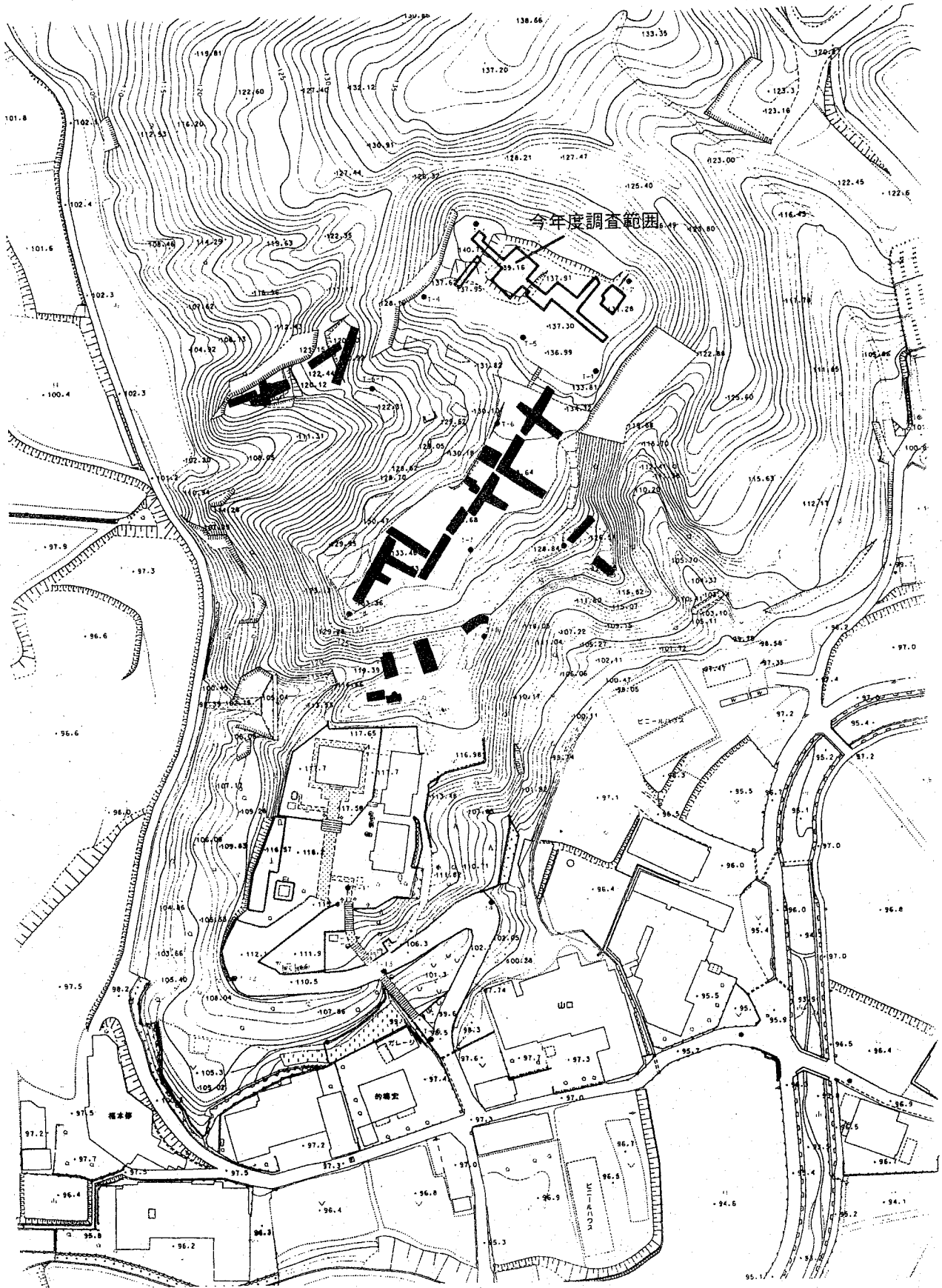
本丸の最高所は標高約 140m で、周りの平地との比高差は約 40m を測ります。平成 13 年度から当教育委員会文化財課が史跡整備に向けての資料を得るため、発掘調査を実施して来ました。

これまでの調査で「西の壇」には^{そせきたてもの}礎石建物が、「二の丸」には^{ほったてはしらたてもの}掘立柱建物があつたこと、「三の丸」背後の堀底の形状はほぼ当時のものであること、「三の丸」と「二の丸」間の土橋状の道は後世に造作されたものである事などが明らかとなりました。

出土遺物も、多量の瓦のほか中国製青磁・白磁・青花、丹波焼の^{すりばち}摺鉢、備前焼の^{かめ}甕、土師器鍋・小皿・^{のきひらかわら}摺鉢などが見つかっています。この内瓦には^{のきまるがわら}鬼瓦、軒平瓦、軒丸瓦などを含んでいます。



第 1 図 端谷城跡位置図 黒丸印が端谷城



第2図 トレンチ配置図 黒色は平成13年度～14年度調査地区

調査の概要

今回の調査は平成17年2月末から行い、現在も調査を行っています。調査は端谷城の「本丸」地区で平成15年度末に設定し、一時中断していたトレンチを引き継ぐ形で実施しています。そして、平成15年度に確認されていた^{せんれつたてもの}塼列建物の規模の確定、^{かっちゅう}甲冑の残存状態の確認と現地での保存処理およびその取り上げに主眼を置いて、調査区の拡張を一部行いました。

「本丸」北西隅には「物見台」と言われている東西約10m、南北約15m、高さ約3mの台状となる箇所があります。これの東に近接して約10m四方で、高さ約1mのやや低い台状部が作られていました。塼列建物はこの一段下がった東の低い方の台状部分から見つかりました。

1. 塼列建物

塼列建物は一辺29cm、厚さ約2cmの方形塼（平瓦状の焼き物）を、建物の外壁に添うように地中に立てて埋めるもので、土蔵と考えられています。地中に立て並べられた方形塼は、雨水の浸入とネズミの害から建物を守るためのものと思われます。

^{ほうけいせん}方形塼は上下2段に積まれた部分と1段のみ確認できる箇所があります。また建物東辺の一部と南辺については、方形塼を見つけることが出来ませんでした。南側については高さ約50cmの段落ちとなり、段の下には石列を伴う東西方向の溝がありました。

建物東辺にはやや大きめの石が塼列を^{ささぎ}遮るような形でL字状に配置されたところがあり、この土蔵の出入り口とも思われます。建物の規模は南辺が不確実なところもありますが、東西約6m、南北約9.5mと考えられます。

土蔵の床面は北・西と南側が20cmほど高くなっていました。この部分には^{こぶしだい}拳大の石が敷かれており、南北方向に^{ねだ}根太を置いた痕跡がありました。おそらく石を一面に敷いた後、根太を約50cm間隔で置き、根太の間に更に石を詰めてから、この上に板を張っていたのでしょう。

このような入念な作業を行ったのは、中に収めた甲冑に対する防湿効果を狙ったものと考えられます。

土蔵と考えられている塼列建物は、西日本を中心として各地の城跡から見つかっています。また、



第3図一博列建物表測図 S=1:50 (上が北)

堺環濠都市遺跡をはじめ中世の都市遺跡でもこのような建物跡が発見されています。

その内、若江城と堺環濠都市遺跡および平安京遺跡例は建物内やその周辺で甲冑の部品が見つかっています。

	城郭名	所在地	規模	城の時期	備考
1	大内氏館	山口県山口市	10.5m×6.6m	1551年廃城	
2	感状山城	兵庫県相生市矢野町	6.91m×8.0m	1577年落城	
3	置塩城	兵庫県飾磨郡夢前町	10.0m×4.2m	1469～1581年廃城	
4	御着城	兵庫県姫路市御国野町	4.6m×5.45～5.25m	1519～天文年間	
5	枝吉城	兵庫県神戸市西区枝吉	詳細不明	15c中頃～1588年	S42年調査
6	伊丹城	兵庫県伊丹市伊丹	4.4m×3.6m以上	1583年廃城	
7	高屋城	大阪府羽曳野市古市	4.5m×3.1m以上 3.8m×3.8m 4.3m×3.8m 3.3m×1.5m以上 6.2m×5.5m以上	1479～1575落城	S59市調査 H5市調査 同上 H14市調査 1981府調査
8	若江城	大阪府東大阪市	5.4m×1.5m以上	1370～1581年	周辺から小札出土

第4図 博列建物検出遺跡（城郭関係）

2. 甲（よろい）

建物の外側でも甲の部品が極少量見つっていますが、殆どのものが建物内の石敷面の北半部から出土しました。これには石敷面に密着しているものと、やや浮いた状態で出土したのがあります。また、甲以外の冑（かぶと）や刀、鏃などの武器は見つかりませんでした。

冑や他の武器類はここ以外の場所にあったのでしょうか。あるいは既に持ち出されたのでしょうか。ただ大事な甲を残してそれ以外を持っていったとは、考えにくいのではないのでしょうか。

この端谷城例は、当時甲冑や武器類をどのように保管・管理していたかを、証明する資料になる可能性があります。

発見された甲は、当時「胴丸」と呼ばれていたものです。表紙の絵や第7図にあるように、胴丸は背中が割れており、甲の着脱はここから行います。胴丸の背中には肩の部分に左右2つの「押し板」があります。現在この押し板が20枚見つかっていますので、胴丸は少なくとも10領あるものと思われます。



第5図 甲（よろい）の出土状態 東から

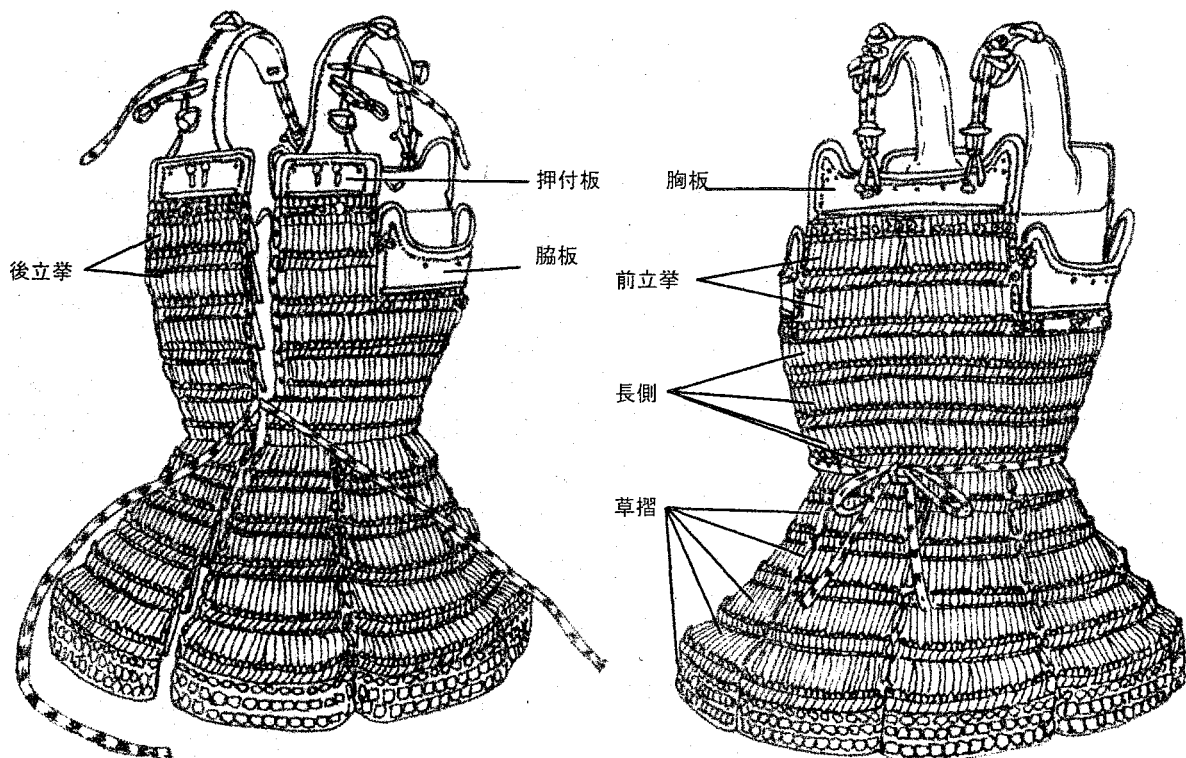


第6図 同上 南から

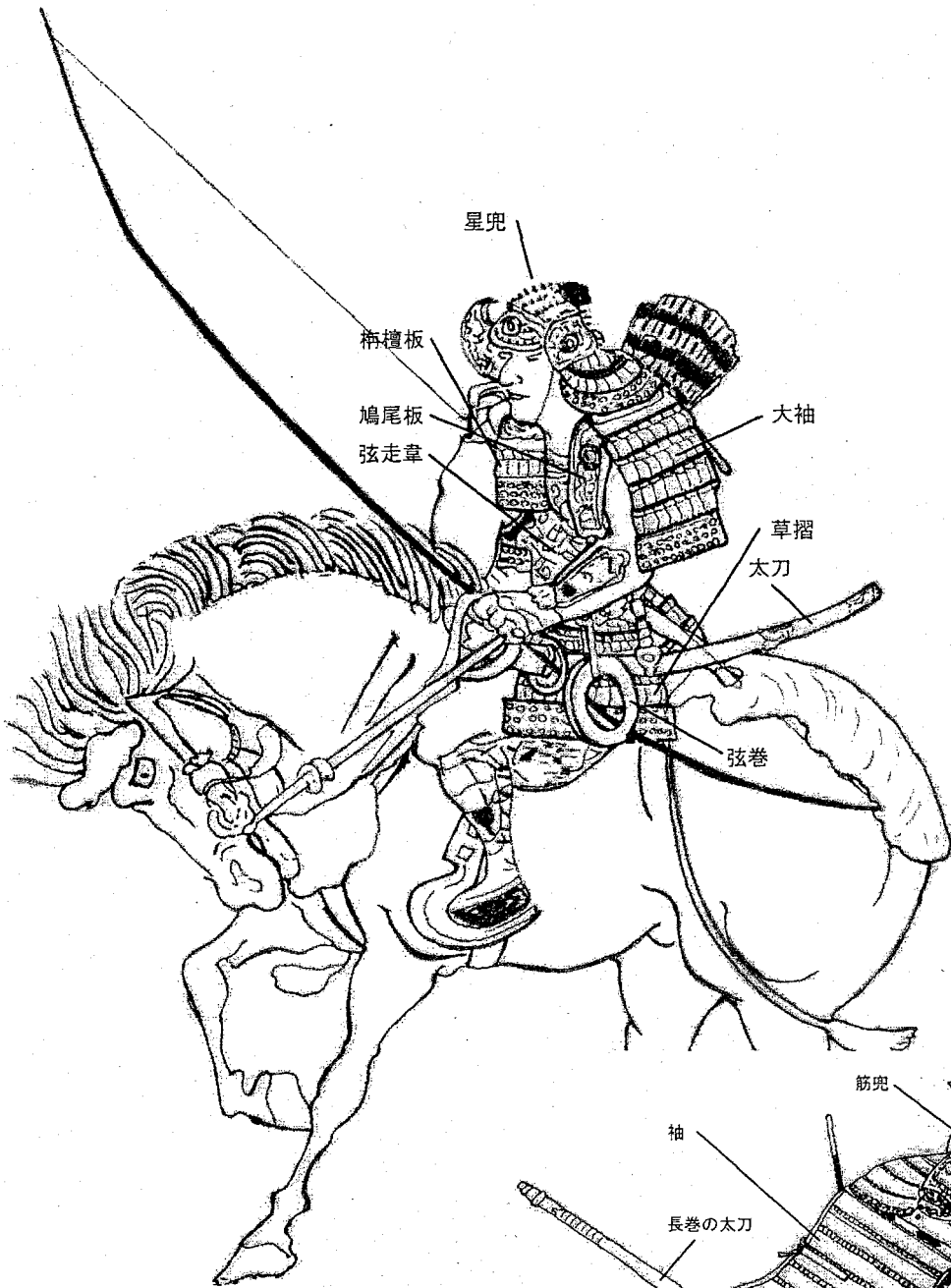
ただ、まだ土の中に隠れているものや、甲のこぎね小札の下になっているものがあるようですので、ほかの形式の甲、「おおよろい大鎧（第8図）」や「はらまき腹巻（第9図）」などが見つかる可能性や、10領以上になる可能性もまだ残っています。

この端谷城は秀吉によって、三木の別所氏が責め滅ぼされたときに相前後して落城したと言われています。秀吉に仕え、後、播磨おのほん小野藩の藩主となった一柳ひとつやなぎ家に残された文書の中に、天正8（1580）年と思われる4月26日付のものがあります。それには一柳喜介という武士が秀吉から敵方の「明石之城」を責任を持って破却はきやくするよう命ぜられています。この「明石之城」をここ端谷城と考える人もいます。

もしこの考えが正しければ、甲が残されたまま潰れた（潰された？）土蔵は城の破却しるわ（城割り）の作法を今に伝えているのかも知れません。

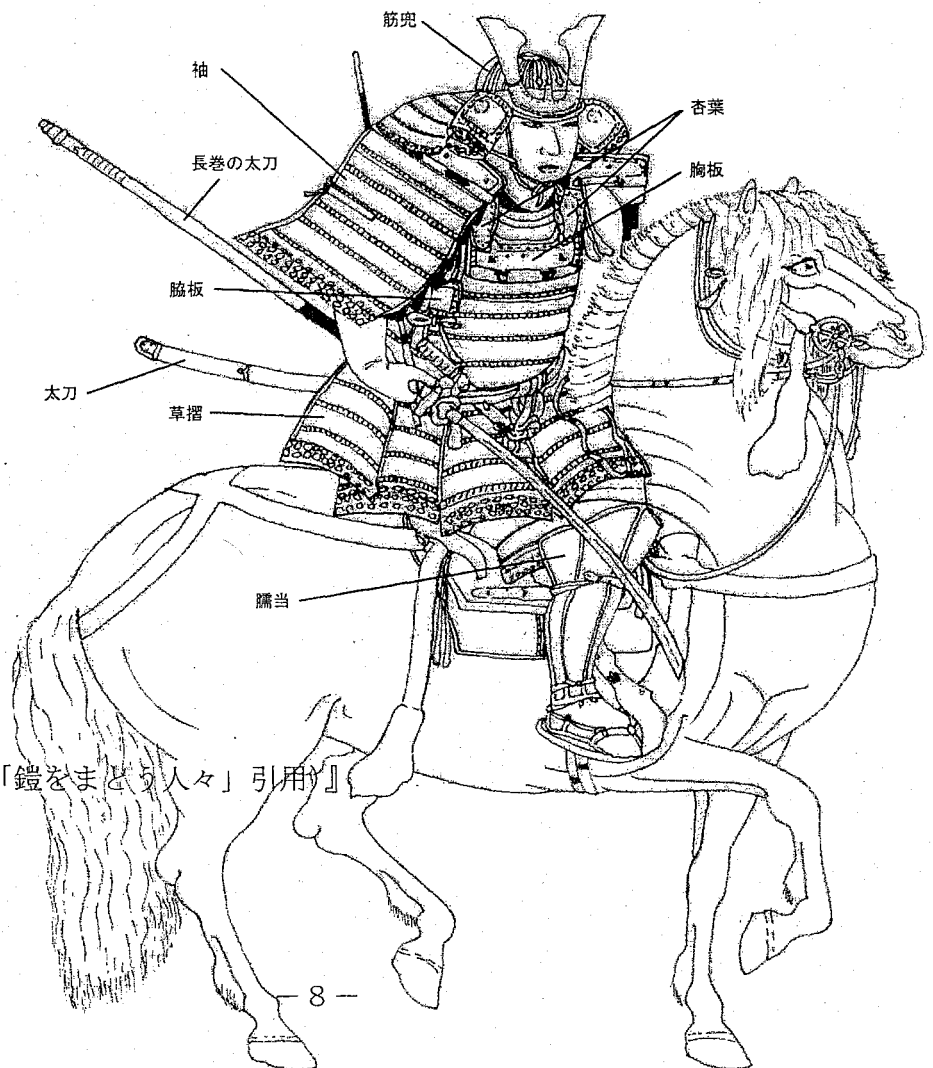


第7図 胴丸（右が正面 左が背面 笹間良彦『日本甲冑大図鑑』所収の図を簡略化して模写）



第8図

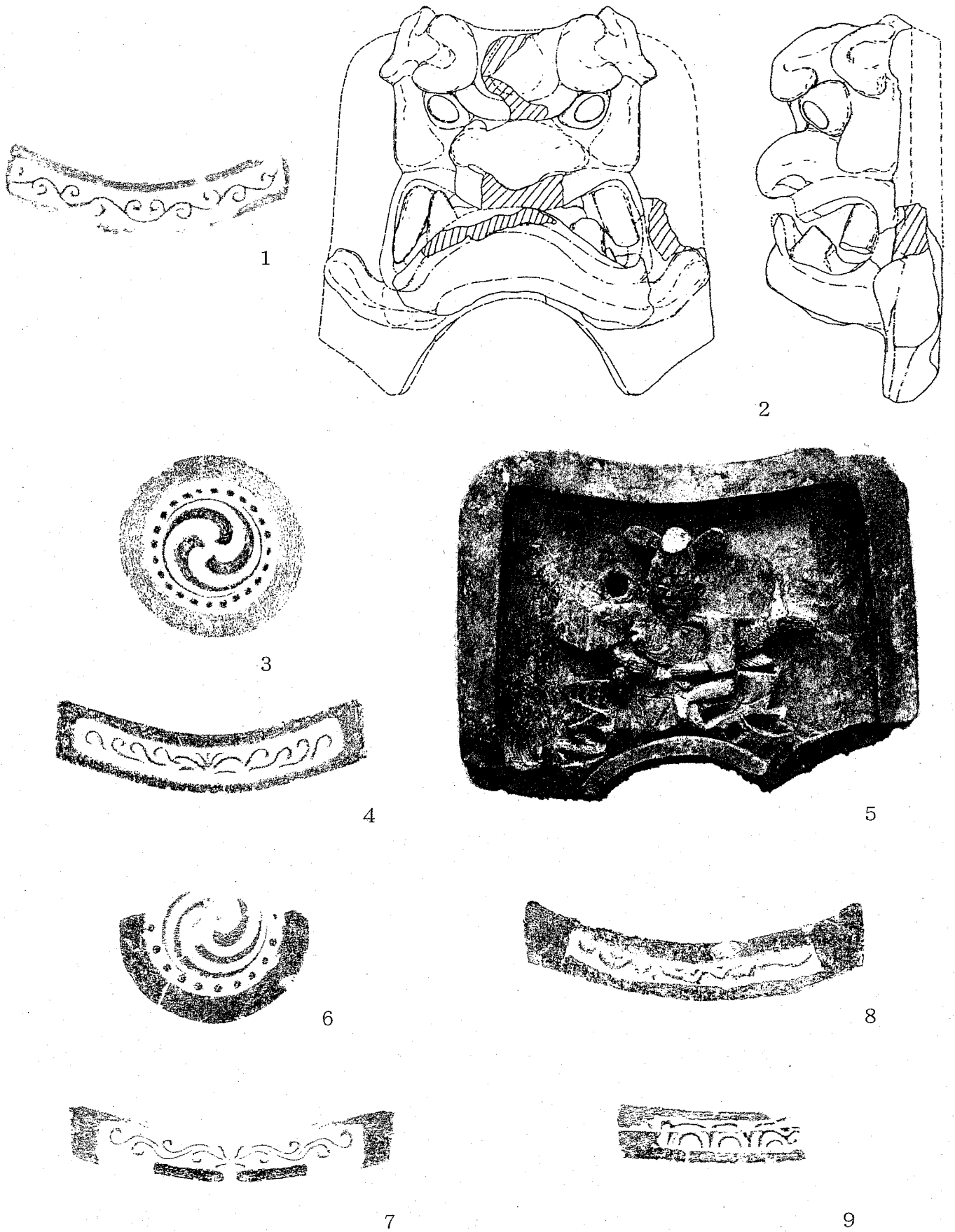
『平治物語絵詞(中央公論社刊)』の大鎧着用の
武士(模写)



第9図 『細川澄元画像』

(永青文庫蔵・藤本正行著「鎧をまとひ人々」引用)

の腹巻着用の武士(模写)



第10図 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦 (2は1/2、5は横幅約27cm、他は1/4)

3. 瓦類

端谷城跡では、これまでに多量の瓦類が発見されています。^{のきひらがわら}軒平瓦だけでも5種類が確認できます。軒丸瓦はおそらく3種類はあるでしょう。

第10図の1は同じ西区櫛谷町^{にといじ}如意寺の三重塔の軒平瓦とよく似たものですが、文様からみると一段階新しいものと考えられます。2の鬼瓦は如意寺三重塔の鬼瓦と表現が全く同じと言っていいでしょう。1と2はおそらく15世紀代と思われます。

3と4は「物見台」や「塙列建物」の周辺で多量に見つかるタイプのもので、4の軒平瓦と同じ文様の瓦は、西区押部谷町^{しょうかいじ}性海寺や加古川市^{かくりんじ}の鶴林寺で見つかっています。このうち鶴林寺のものは1563年～1566年と言われています。5の^{えびすぞう}戎像を刻んだ珍しい鬼瓦も同じ時期のもので、「塙列建物」周辺からは「戎像」だけでなく「宝袋」を刻んだ鬼瓦も出ています。

6と7は「二の丸」で見つかる軒瓦です。8は「西の壇」で発掘されました。また「本丸」地区でもごく少量見られます。

9は「塙列建物」の北西隅で出土した軒平瓦で、北区の^{おうごちようしゃくぶじ}淡河町石峯寺本堂の瓦と同じ文様です。この内6～9までの瓦はおそらく16世紀代のものでしょうか、数も少なく、「物見台」や「塙列建物」の瓦と時期的にどのような関係にあるのか、2つの建物以前にあった建物に伴うものか、またはこれらの建物の補修用かなど今明らかにできません。

以上から、ここには15世紀代に^{かわらぶき}瓦葺の建物（城とは限らないでしょう）があり、16世紀代になって性海寺、鶴林寺や石峯寺などとも関係を持ちつつ、城が作られたものと想像されます。

4. まとめ

今回の端谷城の調査では多くの成果があがりつつあります。多量の甲冑のみならず、多量の瓦類は、この城がどのように作られ、そして壊されたかを^{にょじつ}如実に示してくれています。

このような神戸市だけでなく全国的にみて重要な史跡を、地域の住民の皆さんが今日まで保存に努めてこられたことは、これからの史跡整備事業のあり方を考える上で、非常に重要な示唆を与えていただいたものと思っております。